

大福餅

いちかわつかき
市川司幸

目覚めると、へそのあたりに大福餅が乗っている。こぶしひとつ分くらい、少し大きめの大福餅だ。

布団の代わりにどうして大福餅が乗っているのかは分からない。それどころか今日が何曜日なのか、はたまた今日が平日か休日かもはっきりしない。目覚めた瞬間は思考が鈍くなりがちになるというが、それにしても今日がどういふ日なのかさっぱり分からない。

ただこの奇妙な大福餅は、昨日も一昨日もその前日も、ぼくの上に乗っていたような気がする。大福餅が乗っているお腹のあたりの感覚が、どうも慣れていようなのだ。そしてぼくは体の上にある大福餅を見て、変だなあと思った気がする。でも思い出せるのはその場面だけで、あとは深い霧に包まれて大まかな形さえも思い出せない。

ぼくはそのおかしい記憶のおかげで大福餅に驚かなくなっていた。怖いとも思わなかった。とりあえずぼくは手を伸ばして、大福餅をつかんだ。そしてそこにポイと投げ捨てようとした。ぼくの記憶が確かならこの動作を何回も繰り返しているはずである。

しかしおかしなことにいくら手に力を込めても大福餅はちっとも持ち上がらない。いつもならば玉入れの紅白の玉のようにわずかな力でヒョイと持てるのに、今回はびくともしない。

「ずいぶんと重たいアンコが入っているんだな」

ぼくはそう思って、手で持ち上げるのをやめ、寝返りをうって無理やり大福餅を落とそうとした。しかし、いくら左右に体をねじろうとしても、いくら上半身を持ち上げようとしても、体は全然動かなかった。乗っている大福餅はぼくの体よりも小さいのに、まるで自分よりも大きな大福餅が乗っているかのようにだった。まるで標本

箱のカナブンが一本の虫ピンに刺されて動けないように、この一つの大福餅が針となってぼくの体をベッドに刺めているのだった。

ぼくは四肢と頭部を除いた一切の自由を奪われてしまったのだ。ぼくは困ってしまった。これまではこんなことにはならなかった。

「助けてくれ」

ぼくは叫んだ。ぼくの部屋は二階だが、大きな声を出せば一階のリビングにまで声が届いた。もしかしたら家族がいるかもしれない。しかしいくら耳を凝らしても誰かがやってくる気配は感じない。まだみんな寝ているのだろうか。そこで今度は、

「キヤーキヤー」

と甲高くわめき声をあげた。もし家に人がいるのならば、助けに来ようと思うかはともかく「静かにしろ」とか「何があつたのか？」と誰かしら部屋に来てくれるはずだから。家族でなくとも、近所の人が不審に思ってきてくれるかもしれない。ぼくはそんなことを考えたが、ぼくの期待とは裏腹に、誰かが助けに来るところか一人の気配さえも感じないのである。

ぼくは寂しかった。自分が世界から隔離されているようにさえ思えてきた。ぼくはあきらめて、窓の外景色を完全に覆い隠す青色のカーテンからわずかにあふれる日の光をながめながら、

「もう昼なのだろうか」

とばかり考えていた。それ以外どうしようもなかったのである。

しばらくぼんやりしていると、家の外がだんだんうるさくなってきたことに気づいた。それも並みの騒がしさではない。よく聞いてみるとそれは大勢の人間の怒鳴

り声だった。

「おーい、いつまで家にいるんだー。早く出て来いよー」

「いいかげん観念して出てきたらどうだー」

「いつまでも逃げようたって、そうはいかないぞー」

無数の声は固まりになって、ひとりの野太い男性の声のように聞こえるが、よく耳を澄ませると女性の声も混じっているようだった。大福餅のせいで体を起こすことはできなかつたが、声は寝ながらも判別ができた。

遠くからサイレンの音が近づいてきた。パトカーのサイレンによく似た音だった。音は、近づくにつれてますます大きくなり、家の前の道路でそれは鳴り止んだ。パトカーは家の前で止まったようだった。サイレンの音が止むと、今度はホイッスルの音が響き始めた。

「こらー、やめんかやめんかー」

ピーピーと笛を吹きながら、野次とは別の新しい声が響いた。その声は拡声器を通して発せられているらしく、時々ハウリングの音が鼓膜を震わせた。

「こらこら、やめなさい。むやみに刺激してはなりません。ああいう人間に乱暴な言葉を発しても逆効果ですよ。やさしく説得するのがいちばんです」

拡声器の声といっしょに「黙れー」や「甘ったれたこと言うな」という文句が聞こえてきた。そしてそれに対して拡声器が「こらこら」「やめなさい」と注意をしている。どうやら野次馬はぼくに向かって野次を飛ばしているようだった。

でも不思議だ。まず第一にぼくは自らすすんでこの部屋に居るわけではない。ぼくの体を大福餅が拘束しているため、家から出たくても出られないのだ。もし体が自由ならば、今すぐにも布団を跳ね除けて、シャツとズボンとを履いて外に出ていくだろう。彼らはどうして日

中からぼくに向かって声を荒げる必要があるのか。そもそも誰がぼくのことをこんな大勢の人に伝えたのだろう。そして、伝えたやつはどのようにぼくの様子を伝えたのだろう。きっとぼくのこの状態を変に伝えたに違いない。大福餅のことなんかまったく知らないのだ。

野次馬の暴言は止まる気配がない。拡声器が必死になだめようとしているが効果はない。それどころか言葉の苛烈さはますますひどくなっている。なかには砂か何かを窓に向かって投げってくる者もいる。細かい粒が窓ガラスに当たって音をたてた。

ぼくは決心した。行動しなければ野次はずっと止まな

いだろうと思つた。ぼくは横になつたまま叫んだ。

「ぼくは望んで家にこもっているわけではありませーん。大福餅に潰されて動けないんでーす」

大福餅がお腹を固定してしまつているため声が出しにくかつたが、それでも自分が出せるありつたけの声で叫んだ。家の周りがしんと静かになつた。野次の声も、拡声器の声も、一瞬びたりと止まつた。

そして三秒くらい経つと再びざわめきがおこつた。ざわめきの声は少しずつ大きくなっていった。そして先ほどと同じくらいにまでもどつた。しかし、ぼくに対しての声は全く聞こえなかつた。

さらに、しばらく外の音に耳を傾けていると、いくつもの靴の音が聞こえてきた。野次馬たちが家の周りから去って行っているのだつた。ぼくは拍子抜けした。さらに野次が飛んでくると思つて身構えていたから。群衆は移動しながら口々にぶつぶつと何かを話していた。それは小さくてもよく聞き取れなかつたが、たった一つだけ聞き取ることができた声があつた。それはぼくにとつて

思いがけないものだった。

「なんだ、つまんねえの」

八百屋の店番のような声で、誰かがそう言った。

靴の音は小さくなつていき、やがて聞こえなくなつた。ぼくは再び部屋の中でじつと過ごさなければならなくなつた。

そういえばさつきよりも体が苦しくなつていような気がする。まさか、と思つて大福餅の方を見ると、大福餅はさつきよりも大きくなつていた。こぶし一つ分くらいだった大福餅は、アメリカのピザくらいの大大きさにま

でなつていた。大福餅の端はもうぼくの体には乗り切らなくなつて、ぼくのわき腹あたりからずり落ちてい

り続けてはなかつた。大福餅はまさにいまも大きくな

つてもゆつくりだったが、とても恐ろしかつた。

ぼくは脱出を試みた。抜け出そうと必死に体をねじろうとした。しかし、首元にまで追つた大福餅はぼくに一切の自由を許さなかつた。込めた力は筋肉を固くするばかりでちつとも働かなかつた。ぼくは泣き出しそうになつた。恐怖から、ぼくはかすれた声で何回も「助けてくれ」と叫んだ。

すると、ぼくの部屋のドアを叩く音がした。乱暴で荒々しいノックだつた。

「大丈夫かー？ ドアを開けてくれー」

老人のような声がドアの外からぼくに尋ねてきた。

「身動きがとれないんです」

ぼくがそう言うとドアが蹴破られ、迷彩服を着た数人の男と一人の老医師が部屋になだれ込んできた。

「大丈夫か？ 息は出来るか？ 答えられるか？」

「息は出来ます」

老医師は「分かった」と言うと、そばにいる迷彩服の男に「注射器を」と指示した。ひとりの男が、持ってきた薬箱からひとつの注射器を取り出して彼に渡した。老医師はキャップを外して、ぼくの上の大福餅に注射した。

「これで大福餅の巨大化がしばらく停止する。しばらくは安心して構わない」

とぼくに言った。

「これは安定剤の一種だ。大福餅の巨大化を防ぐ作用がある。大丈夫、きみ自身に悪影響は及ぼさないからな」

ぼくは老医師に感謝を述べた。この老医師が言っていることが確かならば、ぼくは救われたことになる。

「あなたたちは一体どういう人たちなんですか」

ぼくは老医師に尋ねた。老医師はぼくの部屋にある椅子に腰を下ろすとフーと大きく息を吐いた。

「我々は救急部隊だ。といつても、公的な組織とかじゃなくて、有志からなるボランティアだがね。きみみたいな大福餅の病に苦しむ人々の救済の為に働いている」

ここでぼくは、この大福餅が病気であり、ぼく以外にも大福餅に悩まされている人がいることに驚いた。ぼくはてつきり、この大福餅はぼくひとりの上に乗っているものだと思っていたが、そうではないらしい。

老医師はぼくの表情を見て

「どうやらきみは大福餅について全く知らないようだね」。

と言った。もちろんぼくはこの大福餅について何も知っていないかった。

「先ほど私はこの大福餅が病だと言ったが、細かく言えばこの大福餅自体は病ではなく、病による腫瘍のような

ものだ。病は別に存在する。大福餅はその病の進行度によって巨大化していく。しかし病本来についてはあまり研究が進んでいないため詳しいことは分かっていない。ただこの病が及ぼす影響と、どのような環境で悪化するのかは判明している。まずこの病による影響だが」

ここまで言うと、老医師はぼくに

「二日前にきみはどこに行ったのかね」

と訊いた。ぼくは答えられなかった。昨日から昔の記憶がごっそり抜けてしまっていて、自分が二日前にどこに行つて何をしていたのかが全く思い出せないのだ。

老医師はやはりといった顔でうなずいた。

「これが第一の影響だ。この大福餅は、人の記憶を奪う性質がある。奪う記憶の量は病の進行度に比例する。きみの様子だと、病を発症してからだいぶ時間が経っているらしい。

次に第二の影響だが、この病は人の聴覚や思考能力を敏感にさせる性質がある。この病に罹ったものは周囲の言動や行動をよく観察するようになる。例えば他人のまなざしや言葉が変に気になったり、そういったものを悪い方向で自分と結びつけようとしたりする。」

老医師の言葉を聞いて、知らないうちにぼくもこの病の影響を受けているのではないかと思った。今日一日を思い返してみれば確かに思い当たる節がある。

「そういわれてみれば今日は外の音が変に気になる気がします」

ぼくが言うと老医師はうんうんとうなずきながら「そうかいそうかい」と繰り返した。そしてカバンからノートと鉛筆を取り出した。

「先生、ぼくはきつと知らないうちにこの病に、この大福餅に、自分自身を侵食されていくのでしょうか。ぼく

はどうなってしまうのでしょうか。助かるのでしょうか」

ぼくは考えれば考えるほど恐ろしくなつて思わず老医師に尋ねた。老医師はまたうんうんとうなずいて、

「それもまた影響だな」

と一言言つてノートになにやらスラスラと書いていった。

「そうやつてネガティブに考えるのも病の影響だ。きみは確かに病の影響を受けている。しかし気にする必要はない。辛抱強く病と向き合えば自然と病状は快方に向かう」

「この病気に効く薬とかはないんですか」

「今のところ、病を根絶する特效薬はない。あるのは大福餅の巨大化を抑制する、先ほど使用した薬だけだ。そういう意味では厄介な病と言える。

それと、この病が進行する環境だが、これまでの観察によつてこの病は一人きりでいるときに進行しやすいことが分かっている。先ほど君の大福餅が巨大化していた時も、君はこの部屋に一人きりだっただろう。おそらく君が一人でいたことで、病がさらに進行したんだね。それともうひとつ、一人きりでいるときに外部から何かしらの刺激を受けると病状が悪化することも分かっている。しかし二つとも、なぜこの状況で病が進行するのかははっきりとわかっていないのだ」

逃げ出そうと思つても大福餅は体から離れない。病自体を根絶しようとしても薬すらない。ぼくはこのまま大福餅を体の上に乗せたまま生きることになるのかもしれない。そんな考えが頭をよぎった。

老医師はポケットからタバコを取り出して、迷彩服の男に火を点けさせた。老医師が吐き出す煙や、タバコの

先端で燃える炎が羨ましく感じた。

アラームのような音が鳴った。ひとりの迷彩服男がカバンから携帯電話を取り出して老医師に渡した。老医師はしわの多い手で電話を握りながら「うんうん」とか「そうか」とか言っている。電話が終わると

「どうやら十七番の患者が危ないらしい。すぐに向かおう」

と迷彩服の男たちに伝えた。老医師はノートや鉛筆をカバンに仕舞い、タバコの吸い殻を迷彩服男に渡した。

「出て行ってしまいませんか」

「ああ。別の患者がすこし危ないようだ。すぐに向かわねばならない。大丈夫だ。しばらくしたら戻るよ」

すぐに向かわねばならないという老医師の言葉とは逆に、その動作はゆったりとしていた。

「なるべくじっとしていなさい。本とかも読まないようにして、できるかぎり眠ってしまいなさい。夢の中ではいろいろと思ひ悩むこともあるまい」

老医師はそう言い残すと、ぼくの部屋を出て行った。

再び僕は部屋で一人きりになった。

ひとりになり、ぼくは先ほど老医師が言った「危ないらしい」という言葉が引っかかった。危ないとはどういう意味だろうか。「命が危ない」という意味だろうか。もしそれが命にかかわることだったら、こうして寝ているぼくも、そのような状況になるかもしれないということだ。

そう思うとこの大福餅がますます恐ろしい物体に見えてきた。目覚めたときはこの普通の大福餅が自分の命を脅かす存在になるなんてちっとも思わなかった。あの頃の僕だけではない。きっと他の人にも、この大福餅がそんな物体だとは思わないだろう。自分の体に得体のしれ

ない恐ろしい大福餅が乗っていることの恐怖。家を囲んだ野次馬や、拡声器の声の主やぼくに大福餅について語った老医師にもこの恐怖は理解できないだろう。

ぼくは不安から逃れるように目を閉じて、老医師の言う通り眠りに落ちようとした。できるだけ深い眠りにつ

いて、医師が次に自分を起こしに来るまで待とう。目が覚めたらすべてが夢でした、というのを信じられるほど

子どもではない。でも、ゆったり眠って落ち着くようになれば、この大福餅への考え方も変わるかもしれない。

しかし目が覚めたのはそこから間もなくのことだった

。たしかに寝たは寝た。でも夢は見なかった。壁掛け時計の針は三十分しか進んでいない。ぼくはため息をつい

て、もう一度眠れないものかと目を閉じた。しかしすべて

のすべての睡眠を使い果たしたようで、どうあがいても一睡もできなくなってしまった。

眠れないのにベッドの上に居続けるのはとても苦しい。寝返りすらできない状況ならば、尚更一分一秒が長く

過ぎていく。

ぼくは枕元にスマートフォンがあることに気付いた。

老医師はなるべくじっとしていると書いていたが、これ以上何もせずにベッドに寝ていなければならぬなんて、耐えられそうになかった。ラインを開いて、それからなんとなくネットニュースを開いた。

不倫が発覚した俳優がまだ口を閉ざしたままであるという記事。コメント欄は荒れに荒れている。先日食品

偽装が発覚した企業に、また疑惑の目が向けられているという記事。不審な自殺を遂げたアイドルの背後にAB

芸能事務所が……？

およそ興味のある記事を読み終えて、ぼくはスマホを枕元に置いた。腕を布団の外に出そうとしたとき、シー

ツがずれて、枕元のスマホがベッドの下に落ちてしまった。ぼくは手を伸ばしたが、大福餅に体を押さえつけられていて、手が届かない。

ぼくは大きなため息をついて再び天井を眺めた。白い天井だ。スマホは、老医師が来たときに拾ってもらえ

いいだろう。

外から子どもの声が聞こえる。「キャッキャツ」という無邪気な声は、きつと近所の子の声だ。子どもの声は

すぐに聞こえなくなり、代わりにぼくの脳裏に野次馬たちの声

がよみがえる。

真っ先に聞こえてきたのは、あの重く退屈そうな「なんだ、つまんねえの」という声。あの言葉は何を意味していたの

だろう。「つまんねえの」ということは、彼ら

ぼくに何を期待していたのか。でも何を？ ぼくは彼らとは面識がない。彼らの顔をぼくは知らないし、彼らは

ぼくが大福餅のせいで動けなくなっていると知らなかった。そして大福餅のせいだということを知ると真っ先に

帰って行った。そして「なんだ、つまんねえの」。

窓の外でアナウンスが聞こえる。

「行方不明の、ヤマダシロウさんは、見つかりました。ご協力ありがとうございます」

ぼくはこの名前に身に覚えがある。そうだ、以前に行方不明になってた老人の名前だ。何か月だっても見つ

からないので、川や海に落ちたとか、さらわれたとか、殺されたのではないかとか、いろいろ言われていたのに、

結局見つかったのだ。

「なんだ、つまんねえの」

あの声が響いた。実際に誰かが言ったのかわからない。つぶやくような、小さな声だった。外からは何も聞こえない。またよみがえってきたのだ。

「なんだ、つまんねえの」
また聞こえた。

「なんだ、つまんねえの」
「なんだ、つまんねえの」

今度は連続して聞こえた。そして声はどんどん増えていき、まるですぐ耳元で何人もの人間が「なんだ、つまんねえの」と言っているように聞こえる。

ぼくは耳を塞いだ。きつとき注射された薬の副作用で幻聴を聞いているのかもしれない。その幻聴が、たまたま野次馬の声になっていだけなんだろう。

あの声は何層にも重なって聞こえてくる。耳を塞いでも声は絶えることなく聞こえてくる。

「なんだ、つまんねえの」 「なんだ、つまんねえの」

「なんだ、つまんねえの」 「なんだ、つまんねえの」

「なんだ、つまんねえの」 「なんだ、つまんねえの」

ぼくはその声が、だんだんと変わっていることに気付いた。声はだんだんとぼくの声に変わっていつている。

「なんだ、つまんねえの」 「つま」 「んねえの」 「な」
「なんだ、つまんねえの」

ぼくに向かって、ぼくの声が無数に向かってくる。いくつにも分裂して響いてくる。おかしくなってしまうようだ。

突然声が止んだ。ぼくは耳に挿していた指を抜いて、ほっと息を吐いた。ようやく幻聴が終わったのだ。しかしぼくの心には、ぬめぬめしたものが残っているような不快感が残った。これは一体、何だろう。

その時だった。大福餅が再び巨大化を始めた。菓が切れたのだろう。大福餅はむくむくと大きくなってあつあつという間に首まで達した。叫んで助けを呼ぼうとしたが、喉が圧迫されて一言も発せられなかった。ぼくはありつ

たけの力を込めて体全体を動かそうとした。しかし、動いたのは頭から上だけで、それ以外はびくともしなかった。ぼくはもう必死になって最後に残された頭部を動かす、声が出ないと分かっているでも大口を開けて声を出そうとした。大福餅はまさに口の中へと入っというところだった。ぼくは呼吸の危険を感じて思わず口を閉じようとした。すると口を閉じたときに大福餅の皮の一部が歯と歯の間に挟まってちぎれた。それと同時に、破れた箇所から大福餅の中のアンコが勢いよく噴き出してきた。アンコはベトベトとしていて、生温かかった。アンコの強い勢いによって破れ目は拡大していき、恐ろしい量のアンコが流れ出してきた。そこからは考える間もなかった。気道の隅々までアンコが流れ込み、呼吸ができなくなった。閉じるのが遅れた目の上にはアンコが重なって光を遮断した。耳の穴から入ったアンコは鼓膜を破って一切の音を消した。そして十秒もしないうちに、ぼくは本当に世界から隔離されてしまった。

終